

児童の国語力の向上を図る学習指導法の研究

- 「話すこと・聞くこと」領域を中心に「伝え合う力」を高めるための方策を探る -

古賀陽子¹ 藤本謹吾²

今日、社会が急速に変化している中、社会の変化に柔軟に対応できる力としての〔生きる力〕を身につけることが求められている。このような〔生きる力〕の基礎となる国語力の育成に向け、小学校国語科の「話すこと・聞くこと」領域を中心にした言語活動における効果的な学習指導法を探り、実践を通して検証した。

はじめに

文部科学省では平成15年度より児童の国語力向上のために総合的に取り組む「国語力向上モデル事業」を次の研究テーマで実施している。

「話すこと・聞くこと」の力を育てる指導と評価の工夫

「書くこと」の力を育てる指導と評価の工夫

「読むこと」の力を育てる指導と評価の工夫

基礎・基本の確実な定着と個に応じた指導の工夫及び教材の開発

国語科と他教科及び「総合的な学習の時間」等との関連を図った指導の充実

読書に親しむ態度を育成するための取組や学校図書館を活用した読書活動の推進

また、平成16年5月発行の『「確かな学力」と「豊かな心」を子どもたちにはぐくむために...』には、確かな学力を飛躍的に向上させるための総合的施策の一つとして国語力の向上をあげている。

神奈川県においては、『神奈川力構想・プロジェクト51』（平成16年3月）で、主要施策「確かな学力の向上をめざす教育の推進」として、すべての知的活動の基礎となる国語力の向上をあげ、国語教育推進校を指定している。

国語力向上のための学習指導法を開発し、各学校に成果を普及させることは今や喫緊の課題である。二年研究の一年目にあたり、今年度は児童に必要な国語力とは何か、国語力向上のための学習指導法及び児童が自らの国語力向上を実感できる評価等について探った。

研究の内容

1 伝え合う力について

小学校学習指導要領では、国語科の目標を「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を

高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」としている。この目標の中の「伝え合う力」とは、教育課程審議会の「答申」（平成10年7月29日）における国語科の改善の基本方針で「...互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することに重点を置いて内容の改善を図る。」とし、新たに位置づけた力である。

小森茂は、この伝え合う力を「人と人との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら、言葉を通して正確に理解したり適切に表現したりする力でもある。これからの情報化・国際化の社会で生きてはたらく国語の力であり、人間形成に資する国語科の重要な内容となるものである。」（小森1999）と言っている。

今、言葉が軽くなったと云われる時代の中で、自分なりに言葉を工夫し言葉に力を与えて発信することの楽しさや、伝えた相手に喜んでもらえることのよさを味わうことは重要である。小学生のうちに、学級・学校という集団の場だからこそできる活動において、自分の思いや願いを伝え、共感し合えることの喜びを数多く経験させたい。このようなことから、本研究では、通信としての言葉のやりとりから一歩踏み込んで、伝え合う力の基礎となる力、基盤となる力としての「児童一人ひとりが自分なりに心やからだで言葉を伝える力」も育てていくこととした。

伝え合う力を高めるための活動は「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の3領域それぞれにあるが、本研究では特に「話すこと・聞くこと」領域を中心に伝え合う力を高めるための効果的な学習指導法を探り、実践を通して検証した。

2 伝え合う力を高めるための活動について

「話すこと・聞くこと」領域における伝え合う力を高めるために、次のような仮説を立てた。

仮説（1）相手意識・目的意識に切実性を持たせることで伝え合う力を高めることができる。

ア 練習時に伝える相手・本番で伝える相手

イ 伝えたい身近な地域の昔話や自分の話題

仮説（2）児童が自己の伸びを実感できるような評

1 基本研修課 研修指導主事

2 基本研修課 研修指導主事

価の手だてを工夫することで伝え合う力を高めることができる。

ア 評価が生きる練習方法

イ 評価を次の活動に生かす評価カード

3 実践による検証

4人の調査研究協力員の実践により検証した。仮説に基づき講じた手だての中で、特に成果や課題があがったものを報告する。

(1) お話名人(語り部さん)にチャレンジ～民話や地域に伝わる昔話を語ろう～第2学年

ア ペアグループによる相互交流

お話名人(語り部さん)になるための練習方法として、ペアグループを取り入れた。日本昔話「三枚の札コ」と地域の昔話「目久尻川の名の由来」、「独結の井戸」の3話について、それぞれ2人グループを作り、同じ話の同じ場面を語る友だちが必ず1人いるようにした。語りを始める前に今日の練習のめあてを相手に伝え、それから語り始める。語り終わると、聞き手である友だちから、めあてが達成されたかどうかアドバイスを受ける。そして今日の練習を振り返り、教師がコメントするという一連の活動を繰り返し行った。

自分の語りをいつも真剣に聞き、話し方の良いところを「さんはすらすら読むことができるようになったね。前より上手になったよ。頑張ったね。」、もう少し頑張った方がよいところを「もうちょっと大きな声で語るといいよ。ちゃんならできるよ。」等アドバイスし合える友だちの存在が、相手に分かりやすい話し方を身につけていく原動力となった。

ペアグループによる練習では、場の確保が課題となった。教室の後ろまで聞こえる声の大きさで語ると、決められたため、1教室で15グループが一斉に練習すると、児童の声が重なり合い、聞き手も相手の話を聞き取ることができなかった。そのため1時間に最低3教室を確保する必要が生じた。3教室に分散することにより、児童一人ひとりに対する教師の支援が不十分になることも課題となった。3教室に可能な限り足を運び、めあてカードと日常的な見取りにより毎時間支援する児童を事前に決め、支援に当たった。

イ VTRによる評価

練習方法の一つとして、児童が語る様子をビデオに撮り、めあてに沿った語りができているか、児童が自己評価、相互評価する活動を設けた。テレビ画面に語っている自分の姿が映し出されると、恥ずかしそうに耳をふさぐ子、じっと見入る子等児童の反応は様々であった。感想には「もう大丈夫、本番もがんばるぞ!」と自信を持った児童もいれば、「もう少しすらすら話せるように練習する。」と自分の課題を再確認した児童もいた。さらに、同じ話を二人が語っていることから「さんの語りもいいけど、さんの語りもいいね。」と、それぞれの語りのよさを認める発言をし

た児童がいた。この発言をきっかけに、「語りはみんなちがってみないいいね。」とクラス全員で共有し合うことができた。自分の語りを客観的に見つめ直し、相手に分かりやすい話し方について再確認したり、友だちの語りを聞き合うことで語りの幅を広げたりする上でもVTRの活用は有効であった。

(2) 「語り」に挑戦!～鎌倉の語り部になろう～

第3学年

ア アドバイスパートナーとの相互交流からグループ学習へ

それぞれの児童が固定のアドバイスパートナーを決め、いつもお互いの練習を聞き合いアドバイスし合うというシステムを作ったことにより、お互いの上達がよくわかり、自分の語りを見直しやすくなった。学習意欲があまり高くなかった児童が、アドバイスパートナー等から誉められたりアドバイスを受けたことで、意欲的に語りの学習に取り組み、学校生活全般においても積極的な態度が見られるようになった。

アドバイスパートナーとの練習を通したクラスのみ二お話会、他学年への出張お話会の後、自分達の好きな昔話をグループごとに選び、地域のお年寄りに語るお話会に発展させた。自分が選んだ話の面白さをグループの友だちに伝えようと必死で話したり、友だちの選んだ話がどんな話なのか真剣に聞いたりする話し合いをする姿が見られた。また語りを場面や役割ごとに分担したり、語りに合った小道具や衣装を用意したりする等、一人の語り以上の工夫ができた。

イ 伝えたい語りの素材と伝えるための技の学び

身近な地域の言い伝え等をもとに教師が昔話を創作し冊子にした。この創作話は全6話で、学区の悲しい言い伝えをアレンジした長編から、覚えやすくオチのあるひょうきんな短編まで、少しハードルの高い話と語りやすい話の軽重をつけた。冊子を配ると、普段は声が小さく自分を表現することが得意ではない児童が、もともとある昔話を自分流に語ることで安心して練習に取り組めた。話を伝える楽しさを味わう度に自信がついて、聞き手にとって心地よい声の大きさや速さを意識して語るできるようになっていった。

グループの語りでは、地域のお年寄りに喜んでもらえる話を選ぶことへの意欲を持たせるために、あらかじめ担任が、語りに使えそうな民話や昔話の本を教室に多数置いた。児童は目的意識を持ち、今まであまり触れることのなかった本を多く読むようになった。

また、地域の語り部さんを招き、紙芝居やペープサート等様々な語りのパターンを披露してもらった。児童は、上手な語りを聞くことで自分たちの語りの質も上がること、語り部さんの手法や工夫を学ぶことで自分たちの語り広がることを知った。民話独特の語り口調や言葉に触れることで、一人ひとりの言葉の世界が広がっていった。

ウ やる気を引き出す評価カード

学習のめあてや伝える相手を意識づけること、学習の過程を足跡として残すことで学習を振り返り次の活動に生かすこと、自分の伸びを目で確かめられ励みになることの3つの理由で評価カードは大変有効であった。そのためには活動に応じたカードの工夫が重要であることが分かった。

評価カード記載例



(3) 心に残る発表会をしよう～十さいを祝おう～ 第4学年

ア 「生の言葉でのスピーチ」を促す資料

十年間の成長からできるようになったこと、乗り越えてきたこと、関わった人とのこと、毎日の生活で考えたこと、これからの夢や課題等、様々な面から自分について振り返り、その思いを友だちや家族に披露する時間を持った。自分について語ることは容易ではないが、友だちや家族が知らない自分の一面について飾らずに話せるのもこの時期の児童だからであり、様々な友だちの側面を新たに知る好機であった。そのための手だてとして、道徳や図工等の教科と関連させ、自分についての資料や材料を用意し、スピーチテーマを考えるヒントにした。そして、スピーチ原稿から箇条書きのスピーチメモを作成した。スピーチメモを参考にしながら、写真や実物を準備し、実際に指し示し、聞き手の反応を見ながら説明を加えられるように、聞き手に聞いてもらうことを主眼においた生の言葉でのスピーチを行った。その結果、当初発表時間1人5分の予定であったが、全員が箇条書きのスピーチメモだけで7～8分のスピーチを行ったことはうれしい驚きであった。本番でのアドリブの説明は一番期待していたことであったが、写真がわかりにくいと感じたときには聞き手の中に写真を持って回ったり、スピーチ途中で話し手がインタビュアーになったりと、聞き手を意識し聞き手に合わせた生の言葉でのスピーチができ、聞き手からの様々な質問や感想についても的確な返答ができた。時間を超過した発表会になったが、楽

しく満足感を持って終わることができた。この経験から、日常生活においても児童が自信を持って堂々と物事に取り組むようになったことは、何よりうれしい成果であった。

イ 心を伝える児童へのアドバイス

発表原稿を作る段階から担任との個人対応が多くなることが考えられたが、できるだけ友だち同士の練習スピーチを聞き合ってお互いにアドバイスし合えるようにした。また、練習時には他の教師にも聞いてもらい、聞き手にとってわかりやすく、円滑に発表できるためのアドバイスをもらった。児童はアドバイスにより、次の活動へのめあてを持ち、さらに意欲的に取り組むようになった。

アドバイスについては、声の大きさや速さ、わかりやすさ、言葉の使い方、態度といったスキル面だけでなく、その子らしい感じ方をしているか、新しい視点での考え方であったのか、多くの考えを含めた意見だったのか等の話の内容についても触れるように心がけた。教師が児童とともに頷き感心することで、児童もより広く深く考え、より多くの考えや感じ方に耳を傾けられるようになった。児童一人ひとりの感じ方にいかに共感できるか、その考えをクラス全員で共有できるように増幅できるかは教師の姿勢にあると感じた。

(4) 体験したことを分かりやすく伝えよう～委員会活動を伝えよう～ 第5学年

ア 「書くこと」に重点化したスピーチ

高学年になると人前での失敗を恐れるためか、スピーチに対して消極的になりがちである。そこで、「書くこと」は文字で伝えるだけでなく自分の考えを豊かにするという考えから、どんな体験をしたのか、どうして心に残ったのか等その時の思いを丁寧に書き、自信を持って伝えられるスピーチ原稿を作る活動に時間をかけた(12時間扱いのうちの5時間)。その結果、どの児童も積極的に練習に取り組み、堂々と本番のスピーチを行うことができた。また、教師も児童のスピーチ原稿をじっくり評価することで、個に応じた具体的な指導のあり方が見えた。

イ ともに学校を支える高学年

自分の意図や思いを明確に伝えるという目的を持たせるために、来年度初めて委員会活動を行う4年生に向けて、どの委員会がどんな仕事をするかで私たちの学校生活を支えているのかを伝えるというスピーチを行った。一年後輩に意図や思いを伝えるために、適切な言葉遣いや話し方の工夫を一人ひとりが考えた。その結果、4年生からは委員会に関する情報がよく伝わり、来年度委員会を決める参考になったという感想をもらい、5年生としての使命を達成したという充実感を味わうことができた。6年生になったときに、「委員会活動」をテーマに、学校づくりを目的とした5年生と6年生の話し合い活動に発展できればと考える。

4 まとめと今後の課題

4つの実践は、聞き手に伝える情報を伝えることによって与える感動や「私もやってみよう」という意欲を与える体験活動であり、聞き手の反応によって話し手自身が感動し「もっとやりたい」という意欲が持てる体験活動であった。

仮説(1) 相手意識・目的意識の切実性は、学年に応じた手だてを工夫することで十分に解決できた。

小学校学習指導要領解説国語編では、「入門期においては、話し手と聞き手が一対一となる活動を中心に置き、活動経験を積むにつれて一対複数の活動へと広げていくことが大切である。」としている。

語りの実践事例にあるように、低学年では特に第2学年の実践のようなペアグループの活動を重点的に行い、中学年では第3学年の実践のようなグループ学習にシフトしていく。このように系統性を持たせ、国語力を積み重ねていくことが重要である。

仮説(2) 評価の工夫については、幾つか課題が残った。

一つは、話し手と聞き手の音声言語キャッチボールの向上を見取るための評価カードである。評価カードには話し手と聞き手が文字言語でキャッチボールできる欄が必要である。例えば相互評価カードには、めあて、パートナーの相互評価、自己評価を書くスペースがあるとよいことがわかった。評価カードについては様々な活動での開発が必要であり、次年度は各活動における効果的な評価カードについて取り組みたい。

もう一つは、評価規準についてである。第4学年及び第5学年の実践は「書く」活動にじっくり取り組み、スピーチメモ及び原稿を完成させた後スピーチの練習に入るので、評価規準に「書く能力」を設けた。

第2学年及び第3学年の実践は元々ある昔話や民話、教師がアレンジした話を読んで解釈しながら語りの練習をするので評価規準に「読むこと」を設けた。ところが第3学年の実践においては、単元が進むにつれ、書く活動が複数回あることで、個別指導から「書く能力」の向上が見られた児童を評価する必要が生じた。このことから、一単元において主な言語活動で見取ることができる能力等は評価規準に示し、その単元で指導しきれなかった児童についてはその後の単元の中で力をつけられるように、一年間のカリキュラムを常に見直していく必要があるのではないかということが課題となった。評価規準の立て方についても次年度の継続課題としていきたい。

第3学年実践単元の評価規準

評価への視点・対象・単位	話す・聞く能力	読む能力	言語についての知識・理解・態度
◎友達と語り合い、自分の語り方を見直そうとしている。 ◎自分が選んだ「お話」を伝えることを楽しもうとしている。 ◎いろいろな興味の本に興味を持ち、読書の量を増やそうとしている。	◎自分が選んだ民話を聞き手にわかりやすく伝えるため、また物語の面白さを伝えるために、自分なりの工夫をして語っている。 ◎友達と語り合いながら、アドバイスをするとともに自分の考えが伝わるように話している。	◎独特な語り口や言葉の使い方に気をつけながら、お話の中心や場面の様子がよくわかるように、声に出して読んでいく。 ◎語りの話を探すためにいろいろな民話を読んでいく。	◎その場の状況や目的に応じた適切な音量や速さで語っている。

第4学年実践単元の評価規準

評価への視点・対象・単位	話す・聞く能力	書く能力	言語についての知識・理解・態度
◎「十歳を祝おう」という気持ちを大事にして、楽しい発表会を開くために進んで話し合おうとしている。 ◎自分の思いや願い、夢、決意などをスピーチを通して伝え合おうとしている。	◎自分の考えが表れるような話題を選び、聞き手に伝わるよう、組立てを考えながらスピーチしている。 ◎友だちのスピーチについて自分の感想をまとめて伝えている。 ◎発表会の実現に向けて友だちの意見の相違点や共通点を考えながら、進んで話している。	◎自分の今、これまで、これからをわかってもらうために、必要な事柄を選択して話しの組立てを考えスピーチメモを書いている。	◎その場に応じた適切な音量や速さで話している。 ◎相手やその場に応じた適切な話し方をしている。 ◎文と文の意味のつながりを考え、指示語や接続語を使っている。 ◎第3学年に配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、第4学年に配当されている漢字を漸次書いている。

おわりに

今年度は「話すこと・聞くこと」領域の中でも、一対一から一対複数の言語活動である語りとスピーチについて実践し検証したが、活動を活発にする言語活動は他にも多数ある。次年度は、様々な言語活動についての効果的な学習指導法の開発に努めていきたい。

また、今年度は国語科において検証したが、伝え合う力は国語科だけでつくわけではない。4実践においても朝読書やミニスピーチ等の日常活動や社会科等の学習活動で伝え合う力を高める工夫をしている。次年度については、今年度の取組を発展させ、読書活動の活性化、朝の時間及び他教科との関連を視野に入れたカリキュラムの開発を考えていきたい。

稿末にあたり、懇切なる御指導を賜った横浜国立大学教育人間科学部の高木まさき教授に謝意を申し上げます。また、本研究を進めるにあたり、多大なご協力をいただいた調査研究協力員の先生方に深く感謝を申し上げます。

[調査研究協力員]

鎌倉市立富士塚小学校	石川 眞喜
海老名市立杉本小学校	多那 光代
厚木市立妻田小学校	山崎 健司
山北町立三保小学校	神戸 泉

[助言者]

横浜国立大学教授	高木 まさき
----------	--------

引用文献

文部科学省初等中等教育局 2004 『「確かな学力」と「豊かな心」を子どもたちにはぐくむために...』
文部省 1999 『小学校学習指導要領解説国語編』東洋館出版社 p.4、p.25
小森茂 1999 『新小学校教育課程講座 国語』ぎょうせい p.31

参考文献

小学校国語教科書 『四年(上)かがやき』、『五年(上)銀河』 光村図書